心逝く迄

千博

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心逝く迄

【Ｎコード】
Ｎ５３１３Ｕ

【作者名】
千博

【あらすじ】
心逝く迄、
気まま勝手に
只、在るがままに。

いらないモノ（前書き）

自己満足ですが、
何かご意見・ご批判・ご感想等ありましたら、
宜しくお願い致します。

いらないモノ

頭に響く雑音ばかりが耳に流れる
助けを呼ぶお前の声を聴き取れなかったのに
こんな飾りだけの耳なんて引き千切っちまえ

セピア色の褪せた景色ばかりが目に入る
必至に俺を探すお前の姿を探し出すことはできなかったのに
こんな飾りだけの眼なんて潰してしまえ

心とは裏腹に勝手に口が動く
お前の名を呼ぶ俺の言葉はお前の耳に届かなかったのに
こんな飾りだけの口なんて縫い付けてしまえ

助けを求め伸ばし続ける手を
掴むことができなかったこの手も

一人で寂しい思いをしているお前に
駆け寄ることができなかったこの足も

震えて眠るお前の身体に
寄り添うこともできなかったこの身体も

全部

いらない

なにもかも腐敗してしまえ

共に歩いて逝こう

僕は君と歩いて行こう

僕と君の足元には、無数の路が拡がっている

どの路にも灯が煌々と輝いているよ

こっちの路は音楽や笑い声が絶えない賑やかなところだね

そっちの路からはいい香りが漂っているよ

あっちの路ではたくさんの人が笑顔で手を振って迎えてくれているよ

果てしなく長く見える路

終わりは見えないけど

君とならどこへでもどんな路でも歩いて行けるよ

さて、どこに歩いて行こうか

一歩踏み出したその先は、

地獄へ繋がる大穴

地球の怒りか雨風荒れ狂う大海

渇きという渇きが襲う一面拡がる砂漠

生への執着を簡単に断ち切る絶対零度の氷山
絶望の景色が眼前に拡がった
先程見た、灯が煌々と輝く穏やかな路の数々は・・・
隣で僕の手を握って一緒に歩んで行くはずだった君は・・・

あぁ、現実は地獄だったんだね
地獄の深くへ向ってまだ歩く？
夢でもいい幻でもいい
君がくれたこの手の温もりは、もう忘れることができないよ
夢の中でもう一度逢おう
僕は君に追い付くよう、歩みを止めた

人生桜花

また今年も桜の花が満開に咲いた
そしてまた散っていく

温かな風に乗って蕾をつける
ゆっくりと、でも一歩一歩大きくなり
太陽の微笑と共に満開に着飾る
桜の木に訪れる絶頂の晴れ舞台
大観衆の見守る中、鳥と共に歌い、踊る
そしてまた爽やかな風に乗って幸せそうに一枚一枚散っていく

咲くも自由
散りゆくもまた自由

僕も桜の木の様に、強く、美しく、人の目を惹きながら咲きたい
そしてまた、儚く、淡く、人の目を惹きながら散っていきたい

永久に流れよ　この想い

朝起きて、君を想う
食事をし、君を想う
運転中も、君を想う
本を読んでいても、映画を見ていても、お酒を嗜んでいても
君を想う
会話中も、仕事中も、入浴中も
君を想う
一つでも多くのことを思い出せるように、
僕は君を想おう

また、想うだけの空白の一日が終わりを告げる
布団に入り、君を想う
夢の中でだけ、君の温もりを感じ取れる
夢の中でだけ、君の笑顔を思い出せる

いっそ願おう

醒めることがないように、と

いっそ願おう

明日が来ないように、と

七夕伝説

一年に一度だけの伝説
星々が流れゆく、聖なる川のほとり
天を流れる川の向こうに、愛する人が待っている
かささぎ達が恋と恋を結びにやってくる
お互いの愛を重ね合うことが許された一日

３６５分の３６４の日は、
星々の輝く川の前で、貴方を想っているのだろう
翼の橋がかかるその日を、只々ひたすらに待っているのだろう
３６５分の１の奇跡を信じて、想い続けるのだろう

もし、橋のかかる奇跡の日が来ないとなると、２人はどうなるのだろう
東と西の川のほとりで、別々の道を歩むのだろうか
星を破壊しながらも、川を渡り一緒になることを誓うのだろうか

絶対に超えることのできない激流が僕の前に現れたのならば、僕はどうするだろうか
１０００分の１でもいい
１００００分の１でもいい
貴方に逢えるという確かな輝く未来がこの先にあれば、僕は彦星にでもなろう

だがもしも、待つ織姫がそこにいなかったなら・・・
１００分の１を待つ気にもならない
１０分の１を待つ気にもならない
貴方がいないという確かな錆びた未来がこの先にあれば、僕は輝く

川に身を委ねよう

貴方がいるから、僕がいる
貴方が待っていてくれるから、僕は笑っていられる
貴方に逢えるから、僕はその日を信じて待つ
貴方がいなければ、僕は・・・

貴方は今何処にいるの？
笹の葉に一つだけ願い事を

１０００分の１でも待つ
１００００分の１でも待つ
貴方に逢える確かな未来だけ、僕に返してください

ゼロ

散々歩いてきた
時に全力で駆け巡り、
時に一歩一歩ゆっくり噛み締めながら、
休みながら、振り返りながらも確実に歩いてきた

そして手にした多くのモノ
幸せも喜びも楽しみも笑顔も
辛さも悲しみも苦しみも痛みも
好きな人も苦手な人も愛した人も親しい人も
お金も技術も知識も地位も権力も

たくさんのモノを手にしたから
嬉しいし楽しいし幸せだけど
辛いし苦しいし悩みが尽きない

もう重くなっちゃった

一度全て捨てれたら、どうなるのかな
寂しいかな、嬉しいかな
その感情すらも捨てたい

たった今組み立てられた、機械の塊になりたい

過去も未来も捨てた、蛋白質の塊になりたい

光を失った世界

明けない夜はないって、本当ですか？

太陽があるから、太陽が昇るから、眩い光を与えてくれるから、
闇に閉ざされた世界に、一筋の光明が走る
たった一本の細い光は、我々の持つ希望と同じく
無限の拡がりを見せ、果てしない永遠に感じた闇すらも、覆い尽くしていく

悩んでいることが馬鹿らしく感じるまでの朝日
地球上、全てを平等に照らしてくれ、包んでくれる

その暖かな光と共に、我々もまた今日一日を生きていく

ではもし明日、一筋の光明が芽生えなかったら？
明日以降、漆黒の世界が待ち受けているとしたら？

光のない、暗さと寒さと絶望に満ちた闇の中で這いずりながら生きていく？
元々の光自体が夢幻だったのだと諦めて、闇に飲み込まれて生きていく？
新たな太陽に代わるモノを探し出す？作る？生み出す？

這いずり生きる屈辱も、闇に同化する恐怖も、体感したくない
似て非なる太陽なんて知りたくもない

私は太陽と共に生き、太陽と共に活き、太陽と共に逝く
太陽が無くなれば、私も亡くなるだけ

最後に、一回だけ・・・

今、僕にどのくらいの価値があるのだろう
今、僕の生きるこの世界にどのくらいの価値があるのだろう

頭がおかしくなったのかな
疲れてるのかな

君ならなんて答える？
君なら笑って一蹴してくれるかな？

この先、どんな道を進んだらいいだろう
この先、どんな理想を描いていこう

心がおかしくなったのかな
休んでもいいかな

君ならなんて答える？
君なら笑って一蹴してくれるかな？

君が笑いさえすれば、この無意味な日常から抜け出せるよ

もう一回　あと一回
もう一回　あと一回

一回でいい

一回でいいから
お願いだ

僕に微笑んでくれ

君の微笑みを・・・・

もう一回だけ・・・・

HERO

子どもの頃は誰しも憧れるのかな
俺も数多くのヒーローに憧れた

力が強く、足が速く、空が飛べる
頭が良く、仲間がたくさんいて、優しい心
諦めることなく、逆境にも負けずに、勝ち続ける
みんなの人気者のヒーロー

いつからだろう
ヒーローを夢見ることなくなったのは
ヒーローに守られる一般市民でいいと決めつけたのは

でもね、あの日からまた僕はヒーローを目指したんだ
君にとっての、君だけにとってのヒーローでありたいと心に誓ったんだ

世界を救う権利なんていらない
悪人を退治する権利もいらない
君一人を守れる権利だけあれば、それで十分だ

そう誓ったんだ

ごめんね
またヒーローになれなかったよ
また夢見るだけで、子どもの頃から何も成長してないや

たった一つの約束すら守れなかったね

力は弱くても、足は遅くても、空を飛べなくても
頭は悪くても、仲間がいなくても、優しい心すら持っていなくても
君だけは必ず守る

そう誓ったんだ

ごめんね
ヒーローを信じてくれたのにね

かけがけのない君すらも裏切ってしまったね

君に追いつく時、また君の傍に行くよ
今度こそ、これだけは、絶対に誓うから。

不変なる時間

僕の生まれる3年前に君は生まれていた
僕が3歳の時に君は6歳になっていた
僕が成人を迎える3年前に君は成人を迎えていた

当たり前の様だけどなかなか気付けない
人と人との人生の経験値は近づくことも遠くなることもないんだってことを

一生変わることのない二人の時間差のまま、歩んでいくものだと思っていた

僕は誕生日を迎えたよ
来年も誕生日は来るし、再来年も来る

不変だと感じていた時間差が一日一日縮まっているのはなぜ？
こうしている一分一秒で僕は君に近づいているのはなぜ？

苦痛で恐ろしく長い時間の中で、
君に追いつけるその日を夢見てる僕がいる

あと約2年半だね
君に追いついて、君とまた一緒になれるその日

その日だけを見つめて一分一秒を過ごして逝くよ

貴方は・・・

明けない夜はないって貴方は言う
この先朝日は浴びたくないと私は言う
希望を捨てるなって貴方は言う
逃げていった希望はもう存在しないと私は言う
負けるなって貴方は言う
何が勝ちで何が負けなのと私は言う

二度と手に入らない
類似品なんてない
愛・希望・夢・絆なんてのは存在しないのだから

いつでも帰っておいでと貴方は言う
そこは私の帰る場所じゃないよと私は言う
なんでも話してね、聞くよと貴方は言う
話したところで、聞いてくれたところで何が変わると私は言う

二度と手に入らない
類似品なんてない
最高に輝く一等星は堕ちたのだから

優しい笑顔で貴方は振る舞ってくれる
偽善面は反吐が出るよと私も優しく応える
全てを受容してくれようと貴方は迎えてくれる
そんな器じゃ受け止めきれないよと私は言う
絶対幸せなことが待ってるよと貴方は言う
幸せなところなんかに逃げたくないよと私は言う

二度と手に入らない
類似品なんてない
世界で唯一無二の宝を失ったのだから

お願いだから、もう構わないで
貴方も貴方も貴方も貴方も貴方も貴方も貴方も
貴方が何百人何千人といようと
毎日毎日私に向き合ってくれようとしても

私は貴方なんて知らない

二度と手に入らない
類似品なんてない
あの人はもういないのだから

ヒマツブシ

２４時間、３６５日働き続けたい
仕事は好きではない
給料が欲しいわけでもない
でも、暇潰しにはなる

朝早くに出社し、忙しさに身を委ね、帰社し寝る
なんて楽で、なんて効率的な暇潰しだろうか

２４時間、３６５日働き続けたい
過労し過ぎて
何も考えられなくなるくらい、脳が腐ってしまえばいい
何も行動できなくなるくらい、手足が千切れてしまえばいい
何も感じなくなるくらい、心を捨ててしまえばいい

することがない
やらなければいけないことがない
したいこともない

会う人がいない
会わなければいけない人がいない
会いたい人もいない

生きるということは、死ぬまでの暇潰しの時間
死という目的に向かうまでの意味のない時間
暇潰しには、もう飽きた

日々、暇を潰し生きる
日々、生を潰し生きる
日々、死を懇願し生きる
日々、ただただ生きる

逝く為だけに生きる
それが今の僕の人生
今の僕の願い
今の僕のすべて

二人の約束の日

君と約束を交わした日
愛を誓った日

全てが煌めいていた
永遠に朽ちることはないと信じていた
どんな壁でも越えられると

二人なら喧嘩も仲直りもできる
二人ならご飯もおいしい
二人なら寝るときも楽しみ
二人ならなんでも笑いあえる

君がいるから家に帰ることが待ち遠しくなった
君がいるから仕事に行きたくなくなった
君がいるから仕事も頑張れるようになれた
君がいるから僕は笑える

しわができても白髪が増えても
支えてあげよう
支えてもらおう
君が泣くのなら僕は笑おう
僕が怒るのなら君は笑っててくれ
一緒に一生笑いあおう
一人でなら苦痛ことも二人なら幸せを感じれる
二人で幸せになろう
二人で笑い続けよう

僕の命より重く、大切なものが生まれた日だった

なのになんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで

一年経ったよ
もう一年経ったよ
まだ一年しか経ってないよ

僕は今、笑えているのかな・・・
君は今、どんな表情しているのかな・・・

癌細胞

欲張りな癌細胞よ
食っても食っても食い飽きず
どこまで近隣の細胞を食らっていくのか

成長してなお欲張りな癌細胞よ
幼少の頃より食らうペースが上がってきている
どこまで自分の領土を拡大するのか

もう誰にもその歩みを止めることはできない癌細胞よ
お前は満足することを覚えないのか
健康な細胞を全て黒く染めるまで、食べ尽くすまで

食べ尽くした後残るは自己の消滅
宿主だったヒトの細胞を殺し
ヒトが死に至り
癌細胞もこれ以上欲張れなくなる

哀れな
恐ろしい
滑稽な
癌細胞よ

どうか
僕のところへきておくれ

どうか
僕に住み着いておくれ

欲張りなお前を満足させてあげるくらい
僕はお前に全てをあげよう

脳ミソから手足の末梢まで
僕の全てを食らいつくしておくれ

僕の腐りきった
汚い汚い細胞を遺伝子を魂を
微塵も残さず食らいつくしておくれ

無に帰しておくれ

手紙～雲の上へ～

今日もまた想うよ
雲の上の君に逢いたいと

ねぇ、
そっちの景色はどんなんかな？
そっちのご飯はおいしい？
そっちの人は優しい？

ねぇ、
こっちの景色はもう見飽きたよ
こっちのご飯も一人だとおいしくないよ
こっちの人はみんな活き活きしてるよ

ねぇ、
神様ってどんな顔していた？
三途の川って無事に渡れた？
お花畑とか綺麗なのかな？

ねぇ、
一つお願いがあるの
一つ許してほしいことがあるの
僕もそっちへ逝ってもいいですか

僕がそっちへ逝ったらまた会えるかな
君は笑ってくれるかな
それとも思い切り泣くのかな

君は常に僕のことを考えていたからね
きっとまだそんなことは望んでいないんだろうね
思い切り怒られそうだね

でも僕はやっぱり子どもでわがままで自分のことばかりだから
君に逢いたい
それしかないんだよ

だから僕が雲の上に逝くことを許しておくれ
怒らないでおくれ
泣かないでおくれ

ただ僕は君ともう一度
笑いあいたいだけなんだ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5313u/

心逝く迄

2011年11月1日01時01分発行